

松江市立鹿島歴史民俗資料館だより

No.39

2024年4月発行

■ 大阪大学総合博物館で当館所蔵資料の魯迅の手紙が展示されます

このほど大阪大学適塾記念センターの依頼で、当館所蔵の魯迅の手紙と写真を貸し出しました。

大阪大学の原点は、江戸時代に緒方洪庵が開いた西洋医学所「適塾」にあります。大阪大学適塾記念センターでは顕彰活動の一つとして適塾、大阪大学に關係する藤野家三代の展覧会「三人の藤野先生、その生涯と交流—一升八郎と洪庵、巖九郎と魯迅、恒三郎と遼太郎—」と題した展覧会を開くこととなりました。

展示される魯迅の手紙は、昭和9年に増田渉にあてたもので、岩波文庫で『魯迅選集』を刊行するにあたり何を訳して入れたらよいかという質問に答えたものです。手紙には、全て増田に任せろが『藤野先生』だけはいれてほしい、と書かれています。

『藤野先生』とは、明治37年から39年、若き魯迅が若い日に留学生として過ごした仙台医学専門学校で親しく指導してくれた教授藤野巖九郎の思い出を書いた小品です。

藤野巖九郎はただ一人の留学生魯迅を気遣い、親切に指導しました。講義をはじめ一週間たってから、魯迅に講義の筆記はできているか尋ねたといいます。魯迅が講義ノートを見せると、藤野はそれに朱筆を入れて訂正し、文法の間違ひまで正しました。それは藤野の担任の講義が終わるまで続きました。

愛国的な目的をもって医学を志した魯迅でしたが、学校で見せられた映写の中の中国人の姿にショックを受け、国民の精神を改造するためには文芸運動を提唱しなければ、と決心します。学業半ばで仙台を去り東京に向かおうとする魯迅に、藤野は「惜別」と書いた自身の写真を贈ります。藤野から受けた愛情はその後も魯迅の心の中に生き続けました。

魯迅が増田渉に『魯迅選集』に「私ニハ別ニ入レナケレバナラナイト思フモノハツモアリマセン。併シ藤野先生ダケハ訳シテ入レタイ」と書いてよこしたのは、小説家「魯迅」がかつての留学生「周樹人」であることを示し、それが藤野巖九郎の目に留まりはしないかという期待があったからです。『魯迅選集』刊行後も藤野巖九郎の消息は分からず、藤野が故郷の福井県で診療所を開いているのが分かったのは魯迅が亡くなった後でした。

翌昭和12年、増田は藤野のもとに「藤野先生」の収録された『魯迅選集』を送り、著者の魯迅が仙台医学専門学校で藤野から親切を受けた留学生周樹人であったこと、終生藤野先生に感謝をしていたことを伝えています。

展覧会は6月22日まで、豊中市待兼山町にある大阪大学総合芸術博物館で開催中です。なお、6月1日(土)のミュージアムレクチャーでは当館館長の赤澤秀則が「魯迅と増田渉—医師にならなかった二人—」と題してお話します。

■ 松江歴史館「神々の美術 出雲の神像と神宝」

上記の展覧会に、当館で保管している佐太神社の鏡像2点(県指定文化財)が、重要文化財の檜扇、扇箱(島根県立古代出雲歴史博物館保管)とともに展示されます。会期は4月26日から6月16日までです。



魯迅の手紙(部分)と書かれている

併し藤野先生ダケハ訳シテ入レタイ

